

# がんリハビリ 早期支援

## 青森労災病院(八戸) 仕組み新たに構築

### 専門職連携、心身両面で

昨年11月にがん診療センターを開設するなど、がん患者の包括的なサポートに力を入れる八戸市の青森労災病院は本年度、体制強化の一環として「がんリハビリテーション」の仕組みを新たに構築した。院内のさまざまな専門職が連携し、診断直後から体の機能の維持や精神面のケアに取り組むなど、患者に対して心身両面で早期の支援に当たるのが特長。退院後のスムーズな社会復帰につなげたい考えた。

(三浦千尋)

がん患者は病気をものにしてしまつた元の状態に戻すの症状だけでなく、治療には難しくなるといふ。入伴う副作用や後遺症などで、院中に身体機能が低下した身体、精神面にダメージ、うつ状態になったりする患者もおり、病気の治療心身機能はいったん低下しが終わった後も、なかなか



がん治療と並行して体の機能維持や精神面のケアに取り組む青森労災病院。さまざまな専門スタッフが連携して患者の支援に当たる。8月下旬、八戸市

## スムーズな社会復帰へ

退院できないケースもある。

そこで、同病院では診断直後から理学療法士や作業療法士、公認心理師らが患者に関わり、治療と並行してリハビリを実施する仕組みを新たに構築した。

早期にリハビリに取り組む重要性を訴える声は現場からも上がる。理学療法士の田口暢秀さんは「身体機能

を落とさないようにするのが一番の目的。著しい低下を防ぐことができれば、その後の回復にもいい影響がある」と効果を話す。作業療法士の武藤佑子さんも「リハビリの課題に挑戦してもらつて、自己達成感を得られ、気持ちの安定も得られる」と指摘する。

がん治療では精神的な負担も少なくない。公認心理師として日頃から患者と接する松坂真友美さんは「不安を取り除くというより、不安やストレスへの対処法を患者さんと一緒に考えるプロセスを大切にしている」と説明。頻りに病室を訪れ、患者の話に耳を傾けるように心掛けていた。

従来の体制では、作業療法士や公認心理師らが治療開始の段階から患者に関わるケースは限られていた。

がん化学療法看護認定看護師の清水水浩子さんは「さまざまな専門職が関わることで、みんなで患者さんを支えることができ、より良いケアができています」と変化を実感する。

早期からの切れ目のない支援によって、気持ちを前向きにする患者もいる。放射線治療中で、2カ月間入院生活が続いている70代男性は「毎日やるのがたたくさんあるが、かえって気が休まるね」とにややかに話す。

がんリハビリテーションでは現在、入院患者のみに対応しているが、いずれは人員体制を整え、通院に切り替わった患者も継続的に支援したい考え。がん診療センター長を務める真里谷靖副院長は「専門職ならではの知識や技術で関わってもらつて、治療の効果も上がっている。専門職の連携は、がん治療に欠かせない」と強調する。